

総評

作家 高橋克彦

穏やかな争い

本年の最優秀賞に選ばれた福島県の星 祐成君の作品は、全体構成、表現力、独創性の分野に於いて、それぞれに私は最高点に当たる五点を投じたものである。私の中で今回満点評価を与えた作品は残念ながらこの一作しかなかったもので、それがそのまま最優秀賞に選ばれたことは嬉しいし、安堵という気持ちもあるのだが、反面、各県ごとに眺めると、満点には及ばずとも、それなりに「良し」と感じた作品が四県で入選止まりとなってしまったことには首を傾げてしまった。つまりは半数以上の県に於いて私の読み方と他の選考委員の方々のそれが異なっていた、ということになる。もちろん人によって興味の持ち方が様々なのは承知している。その席では特に声高に異論を差し挟むことはしなかったものの、このコンクールの選考委員の役目を仰せつかって、これほどまで極端に感想が違ったことはほとんど記憶にない。

それがなにより気になった。

自宅に戻り、何度か作品を読み返し、こういう結果になった原因をあれこれ探っているうち、妙なことに気がついた。私ばかりではなく、他の選考委員の方々全員にもおなじことが言える。県ごとに推した作品が異なるとは言え、それがすんなりと優秀作に選ばれた確率は半分にも満たない。福島県では星君一人抜き出でていて、他県は稀に見る激戦、とも言えそうだが、残念ながら違つ。もちろん最終審査会に残された作品だからきちんとした文章で構成力も十分だ。が、他のだれ一人として星君ほどに際立った個性が感じられない。あまりに優等生過ぎるのである。生き方、感受性、将来に対する夢、そのことごとく

が立派な覚悟で綴られている。となると選考する側としては「自分に合った価値観」で選ぶしかなくなる。たとえば私はさほど野球に興味がないので外す、算盤そろばんもちよいと苦手、という具合にだ。それがすなわち激戦、と考える方も多いだろうが、きちんとした文章と魂の叫びに満ちたそれとは異なるし、十分な構成力と惹きつけられる展開とは別物だ。厳しい言い方となるが、今回は星君を例外として平均点より少し上での穏やかな争いだった、と言わざるを得ない。だからこそ点数がこれほどに割れたのである。

しかし……これは反対に良い兆候であるのかも知れない。数年前までは確かに激戦と言える選考会であったし、それぞれの作品の重い訴えや抱えている心の痛みが伝わってきた。が、その背景には間違いなく東日本大震災の影響があったはずだ。自分にはなにもできなかった幼い子どもであった分、痛みも大きい。子どもたちはきつともがき苦しんでいたのだ。平和な夢や将来を頭に描けなかったのだろう。

そして、ようやくその呪縛から解放されたようとしている。なんの心配もなく自分の好きなことや夢を語れるようになってきたのだ。

文学は不幸な時代にこそ生まれる。

今回の穏やかな争いこそ我々大人は喜んで受け入れるべきかも知れない。

考えようによっては星君の作品として大震災の呪縛からすっかり逃れた、のびのびとした夢と言えないではないか。

東北によりやく和やかな風が吹き始めた。

その思いを確信できた嬉しい作品たちばかりだったと今は考えは始めている。